

人間性の探究

第7回

オランダ植民地支配と東インド②

2020年度前期

1

*はじめに：植民地支配と教育

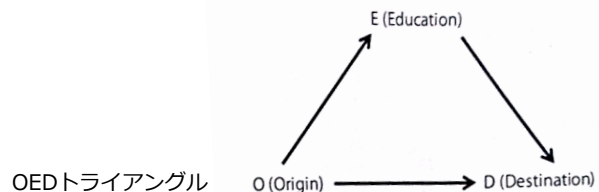
※教育の2つの機能

①社会維持の機能(再生産機能)

...社会の文化や価値を次世代に組織的に伝達し、社会の維持・存続を図る機能。特に学校は強力な統制の手段となると同時に、社会的な階層秩序を「再生産」することに寄与する

②社会革新の機能

...社会の現状を改善し、よりよい生活や文化を創り出していく機能。新たな価値を生み出すことで、時には既存の秩序を打ちこわし、新しい秩序を作り出すことに寄与する



2

2

※様々な国家や社会の教育(政策)をみる視点

・ある特定の時代や社会において、その教育が行われるようになった背景はなにか？
教育に関する様々な意図や要求は、どのような形で反映されたのか？

...歴史的・社会的・文化的状況、教育を与える側(政府,経済界などその他のアクター)の意図、教育を受ける側の要求など

→教育政策・教育制度に反映

・その教育を受けた人々はどのような価値を学び、人生を送ったのか？また、人々がそうした教育を受けた結果、社会のどのような秩序が維持され、またどのような変化がおこったのか？

...教育政策・教育制度→人々の価値観や行動を規定→社会の秩序の維持/変化

※一つの特殊な教育形態としての、植民地支配下の教育

3

3

* 蘭領東インドの教育

問い：蘭領東インドの人々はどのような教育を受けたのか？また教育はどのような人間を生み出し、またどのように社会を変えていくことになったのか？

※オランダの東インド支配(1602年～1949年：およそ350年間)

①オランダ東インド会社による植民地経営の時代(1602～1789)

②オランダ政府による植民地支配の時代(1799～)

②-1：「強制裁培制度」の時代(～1900年代)

②-2：「倫理政策」の時代(1900年代～)

4

4

①オランダ東インド会社による植民地経営の時代(1602～1789)

※東インド会社の到来からおおよそ300年間、イギリス統治期を含む

・オランダ人はキリスト教布教(≡学校設立)に消極的/無関心

<背景として>

...牧師は会社から俸給を受ける一会社員(「サラリーマン牧師」「商人牧師」)

(⇒スペイン・ポルトガル人宣教師による熱心な布教・学校設立※)

※フランシスコ・ザビエルのモルッカ諸島での布教活動

...強大なイスラーム王国の存在・イスラーム独自の教育機関の存在

...東インド会社員の多くは出かせぎ人であり、ヨーロッパ人のための学校も不要

→西洋式学校は極めて少数

※1816年(イギリスからの植民地返還)の時点で、西洋式学校はゼロ

5

5

②オランダ政府による植民地支配の時代(1799～)

②-1:「強制栽培制度」の時代(～1900年代)

<背景> 本格的な領土支配の開始(伝統的な支配機構を利用した間接統治)

<ヨーロッパ人子弟のための学校>

・1818年統治法...教育施設の設置に関する東インド政庁の義務を規定、ヨーロッパ人学校の設置

→1830年には大都市の多くにヨーロッパ人のための学校が設立

(原則として原住民子弟の入学も認められていたが、実際には通わず)

<ヨーロッパ人官吏養成のための学校>

・1832年:「ジャワ学校」設立...統治のために原住民と意思疎通する必要から、若者に原住民語(≡マレー語)と現地の文化・慣習を教える

6

6

＜原住民のための学校＞

- ・1848年：原住民のための教育費支出を決定

...オランダ人が原住民語を学ぶ方針から、原住民にオランダ語を学ばせる方針へ転換

...原住民の上流支配階級(レヘント/県知事やパティなど)の子弟を対象

→1848年には各理事州に1校、翌49年には各理事州に2校、52年には計15校へ増加

→51年には師範学校と医学校を開校

＜キリスト教学校＞

・プロテスタント(オランダ宣教師協会,1797設立)... 1814年からイスラーム教徒のいない未開地または当方の島々に限って布教を許可、1851年からはジャワでも

- ・カトリック(ローマ・カトリック教団)...1807年頃から活動許可

※西洋式学校教育に対する原住民(上流支配階級)の反応

...オランダ語を学ぶことの実益(官吏への任命)を理解し、積極的に子弟を通わせる

7

②-2：「倫理政策」の時代(1900年代～)

＜背景＞オランダ植民地政策の転換

...植民地に対して「名誉の負債」を返還すべきだとする主張(デーフェンテル)、近代教育の普及によりオランダと東インドの精神的一体性を強化すべきとする啓蒙主義的・家父長的な主張(フルフローニエら)など

※1901年：議会開院式でのウィルヘルミナ女王(在位1898～1948)の演説

- ・「オランダは東インドの住民に対して倫理的義務と道徳的責任を負う」(＝倫理政策)

- ・倫理政策の3原則＝キリスト教普及、権力分散※、住民の福祉向上

※権力分散

...政策決定権の相当部分をバタヴィアの東インド政庁に委譲すること

...ヨーロッパ人官吏の職務を原住民官吏に段階的に移管すること

→原住民官吏を大量に養成する必要

→住民福祉向上の観点と相まって、一般の原住民にも開かれた学校の設立へ

8

8

* 東インドにおける学校教育制度

<初等学校>

・村落学校(国民学校,1907-)

...農村部の一般原住民のための学校(原住民語で学ぶ)

・標準学校

...都市の一般原住民のための学校(原住民語で学ぶ) ※

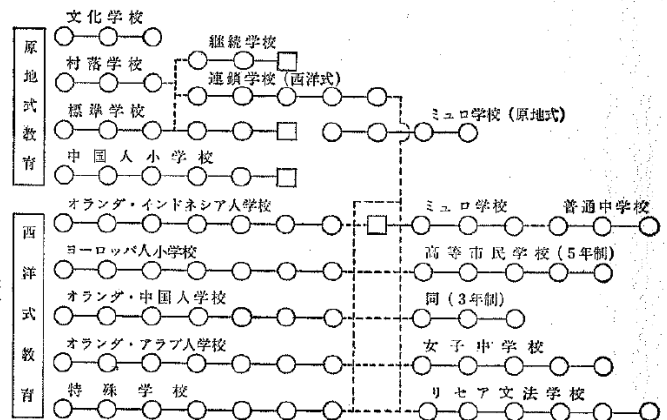
※前身は1892年設置の第二級学校

・オランダ・インドネシア人学校

...原住民首長や裕福な原住民の子弟のための学校(オランダ語で学ぶ)

※前身は1892年設置の第一級学校

第4-1図 インドネシア学校系統 (1930年代)



梅原悟監修・世界教育史研究会編『世界教育史体系6 東南アジア教育史』講談社, 1976,p.86

9

9

* 東インドにおける学校教育制度

<中等学校>

・ミクロ学校(≒高等小学校,1914-)

・普通中学校(1919-)

...A科Ⅰ類：東洋文学科、A科Ⅱ類：西洋古典科、B科：数学・理科科、の3コースを設置

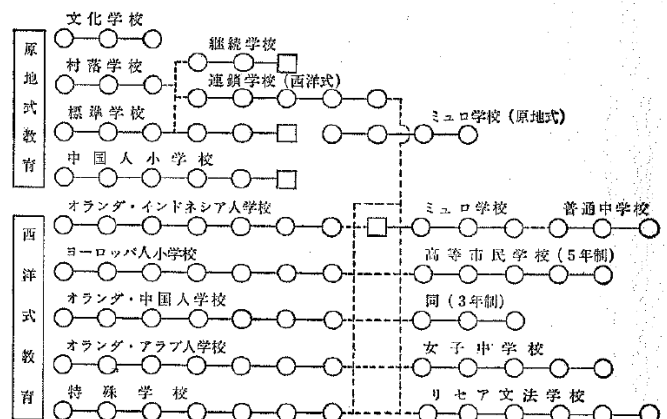
・高等市民学校(HBS)

...東インド初の中等教育機関ギムナジウム・ウィレム三世学校(1860)

...1874年に初の原住民中学生(ジャワのある王の孫)が入学

※「連鎖学校」の設置(1921)により、現地式学校からも中等学校への進学が可能になる

第4-1図 インドネシア学校系統 (1930年代)



10

10

*東インドにおける学校教育制度の特徴

①複線型の学校教育制度

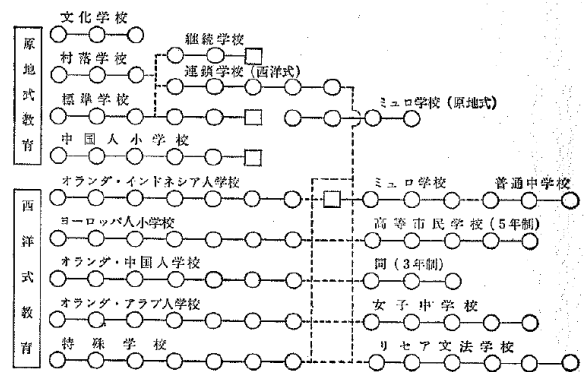
・支配者-被支配者別(ヨーロッパ人-原住民)※・民族別(原住民-東洋外国人)・階層別(原住民の上流階級-庶民)の学校制度

※ただし、ごく一部の原住民はヨーロッパ人学校でも学ぶことができた

・現地式教育と西洋式教育で異なる教授言語

・原住民にとって不利な制度設計
(ヨーロッパ人：7+5年の計12年課程
⇨一般原住民：3+5+3+3の計14年課程)

第4-1図 インドネシア学校系統 (1930年代)



11

*東インドにおける学校教育制度の特徴

②西洋式教育の普及に対するオランダ側の消極性

・オランダは、原住民に西洋式教育への道を開きながらも、西洋式教育の普及に対しては消極的態度であった

「わたしはバタヴィアに上陸するや、三世紀以上にわたりオランダの手中にあったこの都市において、ほとんど全住民人口がオランダ語の最初の語にさえも無知であることを見出した。英領インドやインドのフランス居留地において、アルジェリアというまでもないが、わたしが観察したものとはたいへん相違した事情の状態によって仰天させられた。…まったくの真実は、オランダ人は原住民の無知の土台の上にかれらの優越を確立しようと欲したし、いまなお欲している。オランダ語の使用は劣者と優者の間の溝を小さくする—そしてこれはどんな犠牲を払っても避けなければならない」

(フランス人ブスケの言葉, 梅原悟監修・世界教育史研究会編『世界教育史体系6 東南アジア教育史』講談社, 1976, p. 96)

12

12

表4-5 初等教育就学状況 1930年

区 分	インド ネシア人	東洋外国人	ヨーロッパ人
人 口	59,138,067	1,348,749	240,417
原地式教育就学者	1,656,244	10,252	—
西洋式 //	71,618	24,807	38,236
計	1,727,862	35,059	38,236
人口 10,000 人当り就学者数			
原地式教育就学者	280	76	—
西洋式 //	12	184	1,590
計	292	260	1,590

Indisch Verslag. 1941. により作成。

梅原悟監修・世界教育史研究会編『世界教育史体系6 東南アジア教育史』講談社, 1976,p.102,105

表4-7 インドネシア人のオランダ語識字力調査 1930年

区 分			識 字 者			内オランダ語の書ける者		
			男	女	計	男	女	計
ジャワ・マダラ	成 人	実 数 人口比	1,267,313 11.4	168,813 1.3	1,436,126 —	72,203 0.6	19,640 0.2	91,843 —
	未成人	実 数 人口比	670,810 8.7	129,054 1.9	799,864 —	29,420 0.4	14,095 0.2	435,15 —
	計	実 数 人口比	1,940,737 9.7	298,348 1.4	2,239,085 5.5	101,889 0.5	33,733 0.2	135,682 —
外 領	成 人	実 数 人口比	855,423 17.2	246,236 4.6	1,101,659 —	25,472 0.5	8,127 0.2	33,599 —
	未成人	実 数 人口比	305,649 9.6	96,035 3.6	401,684 —	13,194 0.4	5,117 0.2	18,311 —
	計	実 数 人口比	1,163,750 13.4	343,390 4.0	1,507,140 8.7	38,764 0.4	13,262 0.2	52,026 —
計	成 人	実 数 人口比	2,122,736 13.2	415,049 2.3	2,537,785 —	97,675 0.6	27,767 0.2	125,442 —
	未成人	実 数 人口比	976,459 9.0	225,089 2.4	1,201,548 —	42,614 0.4	19,212 0.2	61,826 —
	計	実 数 人口比	3,104,487 10.8	641,738 2.2	3,746,225 6.4	140,663 0.5	47,045 0.2	187,708 —

1. 計には年齢不明者を含む。

2. 成人—男 15~16 歳からの働き始める者すべてと、女 14~15 歳以上の結婚適齢者。未成年—男 15~18 月の歩行不能の幼児を除いた者以上。

* 西洋式教育が原住民に与えた影響

※アブドゥール・ムイスの『西洋かぶれ：教育を誤って』（初版：1928年）



・作者アブドゥール・ムイス(Abdoel Moeis,1883-1959)

…1883年、西部スマトラのミナンカバウに生まれる。父親はミナンカバウ人、母親はスンダ人。

…同地で初等教育を受けた後、バタヴィア(現ジャカルタ)のストヴィア(蘭印医師養成所)に進学。その後、西ジャワのバンドゥンで新聞記者として活躍

…インドネシア初の大衆運動サレカット・イスラム(イスラム同盟)の指導者となり、同連盟の代表としてフォルクス・ラート(国民議会)に議席をもった

…東インド政府に対して非協力の立場をとり、インドネシアの独立のために闘うことを宣言。そのために追放され、文学活動に入った

…「バライ・プスタカ」(大衆文学館)世代の作家

* 「バライ・プスタカ」(大衆文学館) とその世代

・ 1908年にオランダ東インド政府が設立した国民図書委員会が1917年に改称されたもの

・ ①図書の出版(翻訳書やマレー文学)、②雑誌の発行、③図書館事業、④文学者の育成を行う

・ 福祉や教育の向上のための倫理政策の一環である反面、原住民知識人に対する懐柔政策の側面も

・ 社会性のあるテーマ(民族としての自覚、伝統と近代の対決、新旧両世代間の葛藤、強制結婚など) を多く扱う

15

15

* 『西洋かぶれ：教育を誤って』(初版：1928年)：作品の背景

・ オランダは東インド(現インドネシア)に対して、長い間、愚民政策をとってきたが、19世紀の中葉になって、原住民(現インドネシア人)に西洋教育を施すようになった

・ 20世紀の初頭になると、かなり顕著に西洋の影響が現れるようになり、全体から見てごく少数の例外にすぎないにしても、原住民の間に西洋崇拝の風潮がみられるようになった。そこから、インドネシア的なものから離脱することが文化人だという考え方が生まれた

(= 「西洋かぶれ」)

※ 『西洋かぶれ：教育を誤って』 は1979年までに11版を重ね、現代まで読み継がれている

16

16

＊『西洋かぶれ』の主な登場人物 ※舞台は西部スマトラの小都市ソロク

- ・ **ハナフィ**...オランダかぶれの原住民青年。エリート意識をもち、原住民の慣習を卑下している。コリーに恋心を寄せる
- ・ **コリー**...フランス人の父と原住民の母をもつ混血女性。ヨーロッパ人の市民権をもつ
- ・ **ハナフィの母親**...ハナフィの出世を願ってオランダ式の教育を受けさせたが、それが裏目に出て、母親を馬鹿にする傲慢な息子にしてしまう。しかしそれでも大きな愛で息子を見守ろうとする
- ・ **ラピア**...伝統を重視し、夫に従う慎ましい女性。親同士の取り決めでハナフィと結婚するが、ハナフィに馬鹿にされ、その後、息子と共に捨てられてしまう

17

17

『西洋かぶれ：教育を誤って』

幼少のころからハナフィはバタビアの学校に入れられた。ソロクのオランダ人学校を卒業するのを待たないで、首都へ転校させられたのである。母親は、父を失った一人息子に、中途半端な教育を受けさせたくなかった。恵まれた暮らしをしていたので、ハナフィを立派なオランダ人の家に下宿させた。息子を村の親戚の連中よりも勝れた人間にしたかったのである。

小学校を卒業すると、高等市民学校へ進み、三年間学んだ。母がもう老いを感じ、息子を慕っていたので、ハナフィの学業はそこで終わり、母の強い願いもあって、父親の友人たちの力添えで、ソロクの副理事官の事務所の書記になった。

母親は村の人で、コト・アナウ村から出たことはなかったが、息子に対する愛情から、村のルマ・グダン(ルマ・ガダン)をあとにして、ソロク市でハナフィと一緒に住んだ。

18

18

…母はソロクの借家の家財道具を、息子の好きなように整えるのに、惜し気もなく金を出した。ハナフィが、自分は子供の時からオランダ人の家に住んでいたもので、家具の整え方がオランダ式でなければ気に入らない、と言ったからである。しかし表のベランダから台所や浴室に至るまでオランダ風に作られたので、母親は一日中ぼんやりと考え込んでいた。村からやってきた原住民の女は、椅子に腰をかけるよりも床に坐るほうがよかった。他人と往来するのがとても好きだし、噛みタバコ入れ、噛みタバコ受け、かまど、それらを毎日見ているのが、たいへん好きだった。それが母親の世界であった。

19

19

…母親が年寄り仲間の客を迎えるのに裏のベランダにカーペットを敷くと、ハナフィは言った。「コト・アナウの家では、もちろん家中の床のどこに坐ってもいいけど、ここは町です。僕の客はオランダ人だけですから」

「椅子に坐ると腰が疲れるし、足が痛風のようになるの、ハナフィ」と母親は答えた。「お母さんは下に坐る方がいいよ。物心ついて以来、下にしか坐ったことがないから」

「それがいけないのです、お母さん。村に住む私たちの民族は、時代の変化についていこうとしないのです。一日中、年寄りみて、うずくまっているのが好きです。私たちの民族は、まるで水牛のようですよ、お母さん。それに噛みタバコを噛むなんて…いやだなあ」

とうとう母親は、家の中の何一つ変える気力もうせて、台所の一隅をきれいにし、そこを自分の安息の場所にして、来客を迎え入れた。

20

20

オランダかぶれしている息子を見て、母親の不安はつのるばかりであった。ハナフィは、オランダ風の服装をし、オランダ人とだけ交際した。マレー語を用いる場合は、自分の母親と話すときでも、リアウ語(※高等マレー語)を使い、目下の人に対しては、バタビア人式に(※バタビア訛りのマレー語を)話した。また、マレー語を話すのに、ことさらに発音しにくそうにしゃべったのである。

母親を非常に悲しませたことは、ハナフィが、オランダ語がうまくない人間は、物の数に入らない、と考えていることである。マレー人に関係のあるすべての事柄は、マレー人の慣習に至るまで、非難し、嘲笑したし、イスラム教には、微塵も関心がなかった。慣習を「古い」と言い、イスラム教を「迷信」と言ったのである。彼がマレー人社会から疎外されて生きたのも不思議ではない。そんなハナフィでも、母親にだけは離れがたい愛着を感じていた。[22-24]

21

21

<物語のつづき>

・ハナフィはフランス人の父と原住民の母をもつ混血女性で、ヨーロッパ人の市民権をもつコリーに恋をし、結婚を夢見ていた。コリーもまた、ハナフィに惹かれていたが、父親の助言もあってヨーロッパ人の娘とマレー人男性との結婚が世間に受け入れられないことを心配し、一方的な別れの手紙をハナフィに残してバタビアへ発ってしまう

・コリーとの別れに絶望したハナフィは、二週間高熱にうなされる。回復の兆しの中、彼は自己の運命について思案し、そして以前から勧められていた、叔父(母の兄)の娘ラピアとの縁談を受け入れることを決断する。実は、ハナフィのバタビアでの5年間の学費を負担していたのは叔父であり、母はその恩に報いるため、ハナフィが兄の一人娘ラピアを妻にすることを望んでいた

22

22

二年間の結婚生活で、ハナフィはラピアを自分に「あてがわれた妻」と見なした。夫としてのすべての義務を履行するが、ラピアは自分の心にまで立ち入る権利はない、と彼は言う。…ハナフィの好むことを、ラピアは認めなければならなかった。…ハナフィの母親も、ラピアに対する息子の振る舞いを見るに忍びなかった。

…ハナフィ自身、友人たちと交わっている時は、妻がないのも同然だった。ラピアが彼の家に初めて来た時を除いて、彼にラピアを正式に紹介された者はいない。人が何とか聞き出そうと訊ねても「あー、あいつは本当の田舎者で、オランダ人をとても怖がるんだよ」と言って、はぐらかす。…ハナフィは「ラピアの子供」のシャフェイを無視してしまっている[76-78]

23

23

<物語のつづき>

- ・結婚生活も二年ばかりが経ったある日、ハナフィは庭で狂犬に噛まれてしまう。彼は専門的な治療を受けるために三週間の予定でバタビアに出発する。彼はそこで「運命の人」コリーに再会し、ヨーロッパの市民権を獲得した上でコリーに求婚することを心に決める

- ・バタビアの内務省で臨時雇いの職を得たハナフィは、母親に手紙を書いて状況を説明し、バタビアでの新生活に必要な物を送ってくれるよう頼むとともに、妻ラピアに宛てて一方的な離縁状を送る

- ・その後、ハナフィはヨーロッパの市民権を取得し、「クリスティアーン・ハン」と名乗ることになる。コリーは結婚の直前まで二人の運命を案じていたが、ついにハナフィと結婚する

24

24

二年経った。西部スマトラの家族から、ハナフィは、もう親族から出てしまったと見なされていた。彼は、「オランダ人」になって、外人の妻を娶ったのに、生の証となる手紙は一通も来ない。村にいる親族を彼は敬遠しただけではなく、バタビアに住むマレー人の間にも、彼の知人は一人もいない。

ハナフィは、もう西洋人の仲間入りをしたと思っている。だから西洋人と交際できることを期待した。だが、その期待は外れた。役所の同僚は、妻帯者も、独身者も会えば挨拶する程度で、それ以上の付き合いを避けたからである。…仲間たちは皆、礼節をもって接し、誰一人として二人を軽蔑したものはいない。が、彼らは疎外感を覚えた。

ハナフィが原住民だから仲間たちが嫌っているとも言えない。それらの仲間たちの中には、ヨーロッパ人の友人がいつも付き合っている原住民の若者や夫婦が沢山いるからである

…二人は、ドライブや観劇や、汽車旅行に多くの金を使ったが、その愉しみも張り合いのないものであった。理由はほかでもない、コリーにあった。結婚してから、まるで様子が変わってしまった。娘時代、とび回ることが好きで、真珠のようなきれいな歯並みを見せておしゃべりの相手を魅了していたコリーは、ハナフィの妻になってからは、がらりと変わってしまった。夫に対する礼儀、規律、愛想の面では申し分がなかった。ハナフィは一日中優しい顔に接することができたが、それ以上のものはコリーから期待することはできなかった
[163-164]

25

25

<物語のつづき>

- ・その後、ハナフィがコリーの貞節を疑ったことをきっかけに、尊厳を奪われたコリーはハナフィのもとから去る
- ・やがてハナフィは自分の過ちに気づき...

26

26

* 『西洋かぶれ』の物語が示唆するもの

- ・オランダの倫理政策の下での西洋式教育が生み出した人間の葛藤

...オランダ人と原住民との狭間に落ち込んだハナフィ、教育を受けることで「西洋人」になれるという幻想 (→アイデンティティの喪失、人間関係の崩壊)※

※アルジェリア独立運動の指導者フランツ・ファノンの『黒い皮膚・白い仮面』

- ・伝統と近代/新旧両世代間の葛藤 (母親や妻ラピア⇄ハナフィ)

- ・その他の当時の社会の習慣や人々の考え方

...ハナフィに苦言を呈する副理事官夫人、民族を超えた友情に厚いオランダ人の友人ピート、伝統的な呪師ドゥクンなど

※その後のインドネシア社会の展開

- ・西洋式教育を受けた原住民自らによる近代化改革と、民族としての誇り・アイデンティティの自覚へ

→やがて民族主義運動・独立運動へとつながっていく

27

27

参考文献

- アブドゥール・ムイス『西洋かぶれ：教育を誤って』(松浦健二訳)井村文化事業社,1982
- 梅原悟監修・世界教育史研究会編『世界教育史体系6 東南アジア教育史』講談社, 1976
- 倉沢愛子『日本占領下のジャワ農村の変容』草思社,1992

28

28